

パンタナール通信

一般社団法人 南北米福地開発協会 会報 2023年12月1日 243号
世界平和地球村の建設と自然環境の保護



養豚プロジェクト体験の日に。10月27日



釣り大会では、スルビ、ドラド、ボガ、ピラニアなどを釣りました。10月29日



エスペランサ村の教室を塗装する、合同奉仕チーム。10月31日



エスペランサ村の子どもたちと仲良しに。10月30日

技を持つ若者たちがレダを体験

南北米福地開発協会が主催している「レダプロジェクト体験プログラム」の第2陣派遣が、去る10月20日から11月9日までの日程で実施されました。参加したのは、日本人の青年14人（男女各7人）、引率者として同協会の和田賢一事務局長と、スタッフの角田愛里香さんの計16人です。

今回の派遣のスローガンは、8月に実施された第1陣同様「パンタナールを飲み込め 味わった経験を成長の糧に」というものでした。しかし今回の顔ぶれは、教師、看護師、鍼灸師はじめ団体職員経験者、会社員等々、社会経験のある20代から30代の青年ばかり。したがって、レダ開発に直接関わっていたかどうか、日本で持てるスキルを活かして、いかに協力していただけるかを探る「旅」でもありました。

10月20日、日本を立ち、翌21日にパラグアイの首都、アスンシオンに到着。翌22日には、アスンシオンを出発して一路、最初の訪問地、「ロマ・プラタ」と「フィラデルフィア」を目指しました。向かう途中の気温表示は何と摂氏47度。チャコ地方の厳しい気候を思い知らされました。

ロマ・プラタは約100年前に、プロテスタントの一派・メノール教徒たちが建設した町です。彼らが成功を収めた、牛乳やさまざまな乳製品を製造する工場を見学することができました。また、フィラデルフィアでは「開拓史博物館」を見学、原野を切り開き、雨水を貯めて飲料水を確保しながら開拓した苦勞の足跡を知ることができました。

レダ開拓地へは気象条件が悪く、水路でのレダ行きを断念、陸路をたどって10月25日夕、車数台で到着しました。翌日朝、岩澤春比古所長から、歓迎の言葉とともにレダ開拓20数年の歩みをお聞きしました。さらに、滞在者の方からレダの施設見学、プロジェクトの説明を受け、楽しい歓迎会を開いていただきました。

10月27、28日は、レダプロジェクトの体験学習。パクー養殖、養豚、医療、農業、水づくり、木工などの分野に分かれて、それに携わっている方々から指導を受けながら、お手伝いをしました。先輩方から聞く開拓の苦勞談は、新鮮な話であるとともに、頭が下がるものでした。

10月29日は、釣り大会。ドラドやスルビ、ボガ、ピラニアなどを釣り上げ、楽しい一日となりました。10月30日は、牧畜を行っているカナン牧場を訪問。牧童たちが投げ縄で子牛を捕まえ、感染病対策として注射などをする場面を見学することができました。（次面につづく）



アメリカからの来訪者一行の出発前に。10月22日



新たな未来に向かって出発する若者たちを見送ります。11月2日



浄水場のろ過装置の掃除。10月26日



農業体験でパイパヤを収穫しました。10月27日



マンゴーの果実。10月27日



奉仕活動をしたエスペランサの学校にて。卓上に学校へのプレゼント。11月1日



内務体験で乾物倉庫の管理。10月27日



島田家で児童保育を体験。10月27日



マンディオカを収穫。10月28日



エスペランサ村での奉仕活動で。10月31日

レダプロジェクト体験第2陣（1面よりつづく）さらに、先住民の村エスペランサに行き、小・中・高校を訪問。学用品やボール、サッカーボールなどを各校にプレゼント。子供たちとダンスや歌を披露し合い、早速スポーツ交流に興じました。

翌10月31日は、学校の職員室を整備するために、私たちと地元高校生が協力して壁のペンキ塗りに挑戦。高校のホセ・オルメド校長は「毎年の如く、日本から青年たちが訪れてくださり、子供たちを支援してくださり感謝に堪えません」と語られました。

丸二日間、電気も水道もないエスペランサ村に滞在しました。当然、日没とともに夜は真っ暗闇です。こうした初経験に、参加者は「日本で生活する自分たちはどれほど幸せか、またエスペランサのような村に住む人が世界に多くいるという現実を知って考えさせられることが多かった」と口々に語っていました。

11月1日、レダに戻り、中・長期でレダに滞在している青年たちと共に、ダンスと歌による歓送会。そしてレダと日本をZOOMで結んでの中間報告会を行うことで、名残り惜しくもレダで最後の日を過ごしました。翌早朝、パラグアイ川の岸辺でレダの方々に見送られながら、6隻の高速ボートに分乗して、レダを後にしました。

その後、世界遺産「イグアスの滝」や「鳥の公園」を見学。11月5日にはアスンシオン教会を訪問。午後、青年たちはサッカーに興じました。6日には、ABC新聞社や立川巧雪さん経営の木工工房「みどり」を訪問。そして、レダプロジェクトの一つであるソーセージ製造工房のプレゼンテーションなどを伺いました。

11月7日、パラグアイを出国。日付変更線を越えて9日早朝、日本に無事帰国。実りある21日間でした。（和田賢一）

3年ぶりに訪れた、私の国レダ

去る8月、第1次レダプロジェクト体験プログラムの進行役として活躍した竹内暁信(あきのぶ)さん(26歳)に、藤生青年局長がインタビューしました。

(レダに3年ぶりに行って来られて感じたことをお話しください)はい、了解しました。レダツアーに行く前に、神様と真剣に向き合い、献身をし、祝福を受けて、今回進行役という立場、教育者という立場でもう一度レダに行くことになりました。本当にまずありがたい機会をいただいたこと大変感謝しています。実際にレダに降り立つ前までは、もうすごい興奮状態でした。いわば僕の国だと思っっているのです。それは誰しもが思うべきだと思います。

僕が1年間活動をしてきたレダの地なので、とても楽しみにして行ったのです。でも、実際に空港に着いて、弟妹たちを見たときには、僕個人の欲を満たすための3週間ではないんだということに改めて気づきながら、教育者という立場で考えてみました。



ディアナ村支援プロジェクト：中央、白い帽子が竹内さん。

教育者と言えるほど教育に携わったことはいのでも、それでも僕なりに、普通のプログラムではないと確信して、あれほどに大きな自然と、人生において地球の反対側に希少さを

考えてみたときに、この機会において、この10代後半〜20代前半の人たちが普段では感じ取れないものを感じてほしい気持ちでした。そこで一風変わった進行をやるという思いで、盛り上げに徹したり、いろいろ工夫しながら向かっていきました。レダ、すばらしいですね。今回は、教育者として同行できよかつたと思えました。

今回レダに行つて一番嬉しかったのは、チャマコの従業員たちと3年ぶりに会えたこと。でも、前回僕がいた頃に働いていた人たちで、もう来ていない人たちが結構いて、とても仲良かったメンバーとも会えなかったのは少し残念でした。それでも3年



交流で語らなれど、チャマコと若者たちの村に着いた。

会つて、相変わらず彼ら喜んで腕を広げて待つてくれました。船がレダに到着した

のは夜中だったので、予定より遅れたのです。実は、彼らは僕がその日に来るといふことを知って、予定していた時間帯にみんまで港に迎えに来ていたらしいのです。でも船が一向に来ないから諦めて寝ちやつたのです。次の日の朝、再会を果たしたのですが、本当はそうやって待っていてくれたという事実を聞きながら、ちよつと涙が出そうなくらい嬉しかったのです。3年ぶりに会う日本人に対して、ここまでのおもてなしをしてくれるチャマコの人々、本当に嬉しかったです。いわば兄弟だ、家族だという気持ちなのです。彼らのそういう気持ちを受け、僕自身がごく復興したレダの時間でした。

先生方がごっそりといなくなっていて、寂しく思いました。僕がごくお世話になった方がたくさんいらつしやつたのです。そういった方々にあまり会えなかつたというのは少し残念でした。それでも教育者としての立場で行くことによつて、



従業員たちと竹内さんとの再会を喜ぶ。

本場に弟妹たちが復興する姿、一喜一憂する姿を横で見ながら、自分自身が一喜一憂できた、このことにすごい福を感じました。もう一つの恵みは、柴沼先生、佐野先生と、3週間生活をともに

す。柴沼先生はスタッフというより修練生のようになつて、少年の気持ちを未だに忘れない、童心を忘れない姿がある一方で、人前に立つときは本当に核心を突くお話をされます。人生の今までの70年、80年の経験を持つて話してくださるのです。改めて佐野先生と柴沼先生に惚れ直した期間でもありました。こうして僕は教育者という立場でいきながら教育されました。とてもありがたい機会でした。

もう一つは、10代後半〜20代前半の、人生の貴重なタイミングで一喜一憂の体験をした、若いメンバーたちの濃厚な思い出の中に自分が含まれていたことです。柴沼先生のおかげで、また佐野先生のおかげで、竹内さんのおかげでとか、レダのおかげでとか、そのような話があれば、それだけで今後一生ほっこりするんだろうという気持ちです。僕は常に忘れてくても忘れられないような濃い人生を生きたいと思つているのですが、それが彼らのためにもなれば、何よりなのです。でも僕自身は本当にまだまだ、もっともつと大きくならないといけないと思つています。●竹内さんの3年前の体験記が本紙200号(2020年5月1日号)に掲載されています。

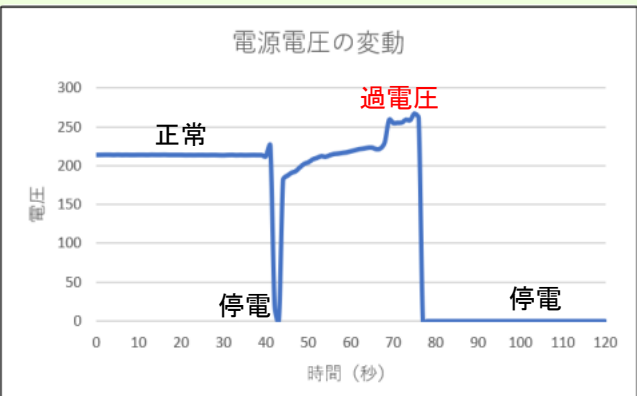
レダの電気屋さん

【第5回】今回は、商用電源の電圧変動の話です。パラグアイの電源は、50ヘルツの220ボルトなのですが、電圧変動が激しく、150ボルトくらいに下がったり、逆に260ボルトを超えることがあります。さすがに260ボルトを超えると、壊れる電気製品が出てきます。そんな時は私の出番ということになります。基本的に過電圧で故障しているの、ほとんどの場合電源回路の部分です。逆に電源回路以外の回路はほとんど無事です。結局壊れるのは、サージアブソーバ、ヒューズ、電解コンデンサの部品に限られ、たまにヒューズの代わりに抵抗器が入っていて、その抵抗器が断線していることもあります。



電圧安定器:写真は1KVAタイプのもですが、2KVAタイプのものも使用しています。

パラグアイでは、そんな電源事情を反映してか、電圧安定器(右写真)なるものが販売されており、これを通して電気製品を使用すると、高電圧や低電



昨年12月18日に発生した電圧変動のデータ。数秒の停電の後、約180Vから徐々に260V程度まで上昇し、その後停電になる様子が読み取れます。

圧をある程度改善してくれる。改善できない場合は電気を遮断してください。ただ、この装置自体が壊れてしまうこともあり、万能的ではありません。レダでは修練所の各部屋に1台ずつ確保してあります。(山崎茂章)

あなたの腕と経験をレダで活かしませんか(4) レダはあなたの力を求めています。あなたの培った技能や技術を、レダの現場で発揮してみませんか。

■牧場管理者・レダのカナン牧場では、約千頭の肉牛を放牧しています。これを1万頭規模にまで拡大するのが、当面の目標です。そのため土地は十分にありません。なお、酪農はしていません。

映画では、馬を乗りこなして牛を誘導するガウチョ(牧童「カウボーイ」)が派手に活躍するイメージがありますが、イメーজがありません。牧場管理者の日常の働きは地道なものです。しかし、牧場の維持と発展にとって、極めて重要な職務です。

牧場の業務は、牛の繁殖(カナン牧場では自然授精)と育成、牛の健康管理(ワクチン接種など)、牛の出荷、放牧地のローテーション、柵作りとメンテナンス、牧草の調査、労務管理、経理などが主などありますが、これらを総合的に監督するのが牧場管理者です。広大な過疎地、チャコ地方で、牧場経営は古くから成立してきた産業です。レダプロジェクト全体にも期待されます。お問い合わせは下記事務局へ。



カナン牧場の放牧地。



牧場の料理は豪快で美味しい。

**一般社団法人
南北米福地開発協会 事務局**

〒213-0001
神奈川県川崎市高津区
溝口3-11-15
岩崎ビル4F

電話: 044-829-2821
FAX: 044-829-2820

支援金振込口座: ゆうちょ銀行
記号10280 番号61349751
一般社団法人 南北米福地開発協会

e-メール: office@asd-nsa.com
ホームページ: https://asd-nsa.com
Facebook: https://www.facebook.com/ledaproject.jp/

**レダ・プロジェクト紹介
用パンフレットPDF版**

紹介用パンフレットは、ネットでも入手いただけます。

スマホなどの端末で、または印刷してクリアファイルに入れてどうぞ。

<https://asd-nsa.com/sk/>

レダの短編動画

- 雨上がり、風にそよぐタマスタレ
- 養豚場でブタとヤギの食事タイム
- ジャテイ蜂 (高級な蜜をつくる)
- 楽しいアサード (焼肉) 11月1日

1

2

3

4